新見公立大学紀要　第35巻
pp. 61－65, 2014

研究ノート

学生が持つ母性看護に対するイメージの変化

－母性看護学の講義と実習を通して－

谷野　宏美*・木下　照子

新見公立大学看護学部

（2014年11月19日受理）

Ａ大学の母性看護学概論の授業目的を，「母性看護の対象は，ライフサイクル各期における女性とその家族であり，対象者の特性を捉え，健康レベルやセルフケア能力が高く，自己決定権をもつ人々への看護援助について学ぶ。また母性看護の基盤となる知識を得ること。」とし，女性のライフサイクル全般を対象としている。本研究では，看護学生の母性看護に対するイメージが，母性看護の学習が進む中でどのように変化していくのかを明らかにする目的で，看護学生を対象に調査を行った。学生は母性看護のイメージとして，対象者を周産期の女性とその家族を捉えやすく，対象者が健康であることに着目していた。しかし，ライフサイクルを通した女性については捉えにくいことが分かった。また，母性看護を特徴的な領域と捉え，周産期を中心とした限定的なイメージが強く，他の領域との違いを認識し，そこに難しさを感じていた。母性看護の学びの場は，学生の次世代育成の場としての役割も備えていることも明らかとなった。以上のことより，講義・演習では，女性のライフサイクルを意識し，その視野を継続して持てるような教授の工夫が必要である。
（キーワード）学生，母性看護学，イメージ

緒言

近年，少産少子となり久しく，地方でも産科病院数の減少，分娩の集中化により，母性看護学実習の受け入れ施設確保に困難をきたすようになってきた。さらに，看護学生を取り巻く環境が変化し，身近な場に妊婦や新生児・乳幼児等がいないため，実習まで妊婦や新生児に関わったことがない者が増加している。そのため，学生は母性看護学実習を実施することに，困難を感じている。このことは，次世代育成として捉えた時にも非常に重要な問題となると考えている。また学生が，母性看護学に苦手意識を感じることも多く，その苦手意識を感じた理由を，山口は「実際のイメージがつきにくい」「特別な内容」「実際の経験がない」と報告しており，ここでも少子化の影響を受けていると言える[1)]。特に，講義の内容で難解だと感じているものに「概論の内容」を挙げている[1)]。一方，学生が母性看護の対象となる妊婦や褥婦等に的確なイメージを持つことは，実習を効果的に実践するうえで重要である。しかし，学生が持つ対象者へのイメージは学習途上であることや生活感覚からもたらされるため[2)]，現実とのギャップから対象理解に困難を感じる恐れが生じる。そこで今回，学生が母性看護に対してどのような印象を持ち講義を受けているのか，また講義や演習，実習が進むなかで母性看護の特徴や対象者についての捉え方について調査・検討することを目的とした。また今回の調査を，今後の教育に生かしていくことも目的とする。

Ⅰ．方法

１．調査対象

本研究の対象者は，研究の参加に協力を得られたＡ大学看護学生２年生 58 名，４年生 64 名とした。

２．研究方法

データ収集方法は，自由記述による質問紙調査である。調査内容は，講義および実習を終了した時点での母性看護のイメージとした。調査期間は，平成 24 年７月から平成 25 年６月まであった。なお，看護２年生には母性看護学援助論終了時，看護４年生には実習終了時に調査を実施した。

３．分析方法

分析方法は，質的分析方法とし，質問紙票から分析テーマと関連の強い文脈に着目し，データを説明するコードを生成，コードからサブカテゴリーを生成した。

４．倫理的配慮

*連絡先：谷野宏美　新見公立大学看護学部　718-8585　新見市西方1263-2

倫理的配慮として，調査への参加不参加問わず成績には影響のないこと，調査への参加は自由意志であることを口頭および書面にて説明し，研究への参加の有無について確認した。質問紙の記載は無記名とした。調査内容は個人が特定できないように処理した。データの管理を研究者が行い，鍵のかかる部屋で管理すること。また研究終了後に速やかにすべてのデータを処分するとした。また，研究を学会および論文で公表することを説明した。

５．講義概要

Ａ大学の母性看護学の講義・演習・実習は，まず，看護２年生を対象に「母性看護学概論」「母性看護学援助論」の講義を実施し，試験を行い合格した学生が，「母性看護学実習」に参加可能となる。実習は，看護３年生の後期から看護４年生前期に行われる。

なお，Ａ大学の母性看護学概論の授業目的は，「母性看護の対象は，ライフサイクル各期における女性とその家族であり，対象者の特性を捉え，健康レベルやセルフケア能力が高く，自己決定権をもつ人々への看護援助について学ぶ。また母性看護の基盤となる知識を得ること。」としており，母性看護の対象は妊娠・出産・育児に限定されるものではない。

Ⅱ．結果

１．看護２年生対象

看護２年生を対象に，「母性看護学概論」と「母性看護学援助論」終了時に，母性看護学についての考えについて質問紙にて調査を実施した。

看護２年生の結果は，表１に示した。

看護２年生は，81 のコードから，17 のサブカテゴリー，５のカテゴリーが抽出された。５のカテゴリーは，【母性看護としての支援と介入】【より健康を目指した看護】【母性看護の特徴】【母性看護に必要な技術】【母性看護の特有の視点】となった。なお，カテゴリーを【　】，サブカテゴリーを[　]，コードを「　」で表した。

まず，【母性看護としての支援と介入】は主に[周産期への支援]をすることを挙げ，分娩をいかに安全に支援していくのか，そのためには妊娠期からの関わりが重要であり，その後の産褥期の支援についても述べていた。続いて，[保健指導]の重要性についても触れており，[家族を含む支援][育児支援]とともに，母性看護の重要な視点として捉えていた。なお，看護２年生は支援や介入といった言葉で，母性看護について述べており，積極的な支援や介入をイメージしていた。

次に【より健康を目指した看護】が挙がり，[状態の維持・向上]については看護過程論の演習を行い，他領域とは異なる視点での看護の展開を講義していることが影響している。さらに母性看護の特徴として講義していた内容である[ウェルネスの視点]が学べていたことが明らかとなった。

次に，学生は【母性看護の特徴】として，[母性看護の在り方]について，「新しい命が生まれる明るく輝かしい場」「ポジティブに捉える過程」「短期間で変化する目まぐるしい領域」などの母性看護学の特徴である急性期，生命誕生の場であることを印象として挙げていた。そして，母性看護学概論での講義内容である[次世代育成や女性のライフサイクル]，[男性への影響]や[母子の関係性]についても着目し，母性看護のイメージは多岐にわたるものであった。

また，【母性看護の特有の視点】として，[母子を一体としてみる看護]を捉え，母性看護学の重要な視点が学生に教授できていることがわかった。次いで [家族全体を対象とする看護]として捉え，女性だけが対象でないことを認識していた。さらに[心理面への看護]の必要性も認識していた。

最後に【母性看護に必要な技術】として[観察の重要性]を挙げ，観察項目の多さや著しい変化について観察することを印象として捉えていた。

２．実習終了後の看護４年生対象

看護４年生への調査結果を表２に示した。看護４年生は，64 のコードから，27 のサブカテゴリー，７のカテゴリーが抽出された。７のカテゴリーは，【母性看護の特徴】【母性看護の支援と介入方法】【母性看護の特徴的な対象者】【命と人生への関わり】【母性看護特有の視点と知識の必要性】【母性看護の難しさ】【看護の中での母性看護の捉え方】となった。

まず，【母性看護の特徴】として 11 のサブカテゴリーが挙がり，幅広い内容が抽出された。[観察の重要性]が最も多くのコードを占め，[母子一体である]ことや[正常な経過への支援]を母性看護の特徴として捉えていた。[正常な経過への支援]とともに[異常時の早期対応]も認識していた。産科の入院が短いことから[短期間での関わり]が印象として残り，[対象者の背景の把握]や[個別性の重要性]を挙げ，実習での学習が反映していた。また，褥婦と新生児の[時間的変化]が著しいこと，[個人情報の取り扱いと信頼関係]が重要であることを特徴として捉えていた。

次に【母性看護の支援と介入方法】として，[保健指導の重要性]，[セルフケア向上のための支援]，[退院後の育児支援]が挙がり，これらは実習での経験からくるものである。

【母性看護の特徴的な対象者】は，[家族も対象となる]ことや[対象者が健康である]ことが挙がり，他領域との比較から母性看護の特徴として学生の印象として残っていた。

【命と人生への関わり】も挙げられ，[命の誕生] や[次世

表1　講義を終えて考える母性看護学（看護2年生対象調査）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
母性看護としての支援と介入	周産期への支援	母親のよりよい出産を支援していくこと
		母子ともに安全に妊娠・出産を行えるよう援助すること
		妊娠期の身体的変化をよく理解し、援助を行う
		よりよいお産と、産後を迎えてもらうために行う援助
		母子両方が安全に分娩や成長するためのサポートとなるもの
		健康な人の健康水準をキープしつつ、出産というライフイベントを滞りなく通過できるように介入すること
		妊娠・出産・子育てなどについて母親を支援できるように寄りそっていけるような看護
		妊産婦の支えとなる存在
		出産する時だけでなく、その前から始まっており、出産後も看護を受ける対象
		妊娠してから出産、産褥までのすべての過程のこと
		母親の心理面について理解し、より安心・安楽に妊娠に取り組めるように母を支えるもの
	家族を含む支援	母親・児・その家族に対して行われる教育や援助
		それぞれの女性及び家族に合ったサポートを提供する
		妊婦・胎児だけでなく、家族の健康も考え援助を行う
		妊婦、胎児、褥婦、新生児だけでなく、その家族も看護を受ける対象者
		健康面だけでなく、家族の社会面や心理面といったすべての環境を見て介入していくこと
		母親だけを見るのではなく、その児や家族全体を看ていかなければならない
		新しく生まれる(つくられる)家族を支えていく
	保健指導	正しい指導を行うこと
		健康である対象者をより健康になるように、援助や指導を行うこと
		母子ともに健康でより良い妊娠、出産、その後の生活を指導支援していく
		母親・児・その家族に対して行われる教育や援助
		指導が重要
		セルフケアができる方に対する看護なので、コミュニケーションや教育がとても重要な場
	育児支援	子育てで不安を抱えている親子を支えること
		産婦が退院後には医療者の力がなくても育児が行えるよう手助けをする援助をすること
		妊婦や母親が児を育てていく上で、看護的な介入は安心・安全な子育てをしていくために必要
		問題を解決するためのケアではなく、この先母と児、および家族がよりよい関係を築いてスムーズに育児ができるようフォローをしていくこと
より健康を目指した看護	状態の維持・向上	通常(健康)の場合は維持し、異常な場合は全体を通して改善すべき問題を考えていく
		母性は比較的負のイメージとは遠く、生、安全、健康であることが前提であるので、そういった方向につなげていくのも看護師の大切な役割
		母親とその子どもの健康を増進、または維持するために支えていくこと
		母性看護は状態を良好にするか維持すること
		問題を探すのではなく、どんどん悪くなるのではなく、維持向上させるのが目的
		健康な人の健康状態を更にアップさせていく
		向上を目指す
		健康な状態の人をより健康にする
		悪い所を治すのではなく良い状態を保つこと
		健康な状態をより改善していくこと
		健康な人をより良い方向に促すもの
	ウェルネスのための支援	健康である対象者をより健康になるように、援助や指導を行うこと
		母子ともに健康でいられるように援助すること
		健康的に子どもを産んだり、子どもを産んだあとに、健康でいられるように援助していく
		産褥婦における看護は、状態をより良くしていくような援助・支援をしていくこと
		母親の健康問題のみに介入するのではなく、問題がなくても良り健康となるための介入も必要
		両親の子に対する愛着形成を促し、健康を保つことを援助すること
母性看護の特徴	母性看護の在り方	母性看護とは妊婦から出産までと幅広く、特に信頼関係を要する分野
		母性は母体が短期間で変化する目まぐるしい領域
		次世代を支える母性看護も必要不可欠なもの
		より健康な状態で母子が退院していくことを目標にしている分野
		問題をネガティブにとらえるのではなくポジティブにとらえる過程
		分娩は、時には死と隣合せになるが、本来は新しい命が生まれる明るく輝かしい場
	母子の関係性	母親と児の関わりを大切にする
		母親と子どもがより良い関係を築き、生活していくこと
		母性看護とは母から子への愛を看護の視点からケアしてうまく育まれるようにするもの
		母子間の愛着形成の橋渡しとなる役割を担っている
		母性は母体だけでなく胎児についてもよく考えなければいけなくて、どちらかの健康が悪くてももう一方に影響する
	次世代育成や女性のライフサイクル	子どもをつくることは、次世代をつくるための大切かつ必要なこと
		妊・産婦だけでなく、幅広い人々のケアにあたる必要がある
		女性のライフサイクルにおける機能・形態などを学び、そして出産を学び、なにか人間の神秘
	男性への影響	女性の大変さや、新生児のことがわかり、男性にも関係あること
		男性にとっても女性にとっても人生の一大事
母性看護の特有の視点	心理面への看護	身体的援助だけでなく、心理的な援助が大切
		母子とその家族の不安に寄りそうための知識
		看護の対象が母子の両方であり、お互いに影響しあっているため、心理的感情が大きく関わっている
		新しい命の誕生する際の家族の心理をより良いものにするために援助するもの
		母性看護とは、妊婦さんの不安な気持ちを基礎において、自分のケアがどのように影響するかを考え、心情に寄りそうこと
	家族全体を対象とする看護	妊娠期から出産、退院までの過程において、母親、児、家族を対象に看護を行っていくもの
		新しい命を産むことに対しての不安や恐怖、知識の不足をささえ、補うことが母性看護の役割
		母体だけでなく児また家族のケアが大切
		母性看護は、妊婦または褥婦だけをケアするのではなく、その家族にも目を向けていく必要である
	母子を一体としてみる看護	母親と児の両方を視点に入れて看護すること
		母親と新生児の両方の健康管理をすること
母性看護に必要な技術	観察の重要性	観察が重要であり、日々変動がある中で、正常や異常を正確に判断しつつ、母親にも技術の指導などを行っていくこと
		観察項目が多く、異常の見落としにはとくに注意しなければならない。
		日々の観察や良くするための援助
		健康の維持・向上のために少しの変化も見逃さない観察力
		よく状態を観察すること
	ニーズと変化	正常、異常をきちんと知り、少しの変化も見逃さない手技が必要
		妊娠・出産・育児に対する喜びや不安などの心理面や、痛み・苦しみ・疲労などの身体面、家族関係や社会的資源の利用などの社会面についてアセスメントし、本人のニーズを尊重し、支援すること
	セルフケア重視	看護ケアとして手を出しすぎないように、セルフケアを支援していくようなケア
	繊細な看護	負担が大きい時期の看護なので、繊細な看護が必要

代][女性の一生涯][不妊]への関わりとして，周産期以外の関わりについても認識していることがわかった。

【母性看護特有の視点と知識の必要性】は，[幅広い視点]と[特有の知識の必要性]から構成されている。

【母性看護の難しさ】として，[支援]，[アセスメント]，[母子一体として看護すること]が抽出され，母性看護の特徴が難しさとして捉えられていた。

【看護の中での母性看護の捉え方】として，[はじまりの領域]との認識を持ち，命の誕生を全てのスタートと捉えていた。

表２　実習を終えて考える母性看護（看護4年生対象）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
母性看護の特徴	観察の重要性	妊娠期から健康状態を観察
		予測をしながら観察
		健康や経過に異常はないか観察
		急性期で展開が早く日々観察する視点が変化
		観察と保健指導が重要である
		異常の早期発見と、より母子関係、育児につなげていくためには高い観察力が必要
	母子一体である	母子を一心同体として捉え、ケア、アセスメントを行っていく必要がある
		母子を一体と捉えた看護が何より必要不可欠である
		母子二人を同体としてとらえていくのは母性独特の看護である
		母児を別々に捉えるのではなく、一つとして捉え、両者の状態を把握し、その状態に合わせた看護を行っていくこと
	正常な経過への支援	正常な経過をたどっていけるよう、早期からの介入を行う
		母性の看護で必要なのは正常な経過が送れるように援助していくこと
		出産という女性にとって自然に起こる変化を、母子ともに健康な状態で乗り越えるためのサポート
	異常時の早期対応	異常が見つかった時の対応は重要
		異常を早期発見すること
	短期間での関わり	短期間でも母子との関係を観察したり、ケア、指導を行うことが大切
		短い期間で今後続けていかなければならない育児への不安を少しでも和らげる必要がある
	対象者の背景の把握	家族など、患者さんの背景をとらえることも必要
		対象の生活を知り、生活に沿った援助をしていくことが特に大切である
	個別性の重要性	個別にあわせた指導や観察、情報提供が大切
	時間的変化	妊娠期から産褥期まで時間的変化が大きく影響するもの
	個人情報の取り扱いと信頼関係	人工妊娠中絶などの非常にデリケートな部分も含んでいるため、看護者と対象者との信頼関係が他の領域に比べ、重視されている
母性看護の支援・介入方法	保健指導の重要性	妊娠期からの指導によって、異常になることを未然に防ぐ必要がある
		看護もケアといったものは特に行うことはなかったが、指導・教育などはしっかりと行う必要がある
		ケアを実施するというよりも指導・助言を通してよりよい方向に導くことが重要
		母性看護のケアで一番重要なことは、保健指導だ
		観察と保健指導が重要である
		保健指導を行うことの必要性は他分野の看護よりも重点を置かなければならない
	セルフケア向上のための支援	対象者がセルフケアして行けるように導くことが大切な役割
		母性は病気ではないので、セルフケア能力を高めることが重要
		母性看護は疾患ではなく健康な人について、健康課題を捉え、対象がセルフケアすることができるようにしていかなければならない
		対象者のセルフケア、セルフチェックの力が重要であることが多い
	退院後の育児支援	安心して在宅でも継続して育児を続けられるため
		母親が退院しても育児が出来るような援助の過程
		子どもの育児環境など退院後に目を向けた看護を提供
	継続した支援と包括的な支援の必要性	命を生み出し、お母さんと赤ちゃんが新しいスタートをきれるように、妊娠期から分娩期、産褥期、新生児期さらに育児期までを支援していくこと
		母子・パートナー一体で考え、少しでも家族のバースプランに添い、家族が協力して、お産、子育てへと向えるよう支援を行う
	満足な分娩への支援	納得のいくお産に導くこと
	母性育成への支援	母親の母性を育てる援助を行うこと
母性看護の特徴的な対象者	家族も対象となる	家族が看護の対象である
		母子関係や親子関係、家族関係など、家族のことを理解し、看護していくことが母性看護なのだ
		対象が母親と子どもだけでなく、その家族も含めたものである
		母親だけが対象ではなく、生まれてきた赤ちゃんやその家族も対象
		母性の対象は母子とその家族であることを忘れてはならない
		対象は母子とその家族である
	対象者が健康である	対象者は「健康」であることが普通
		健康な人を対象にすることが多い
		母性の対象は健康な人
		セルフケアができる人が対象であることが母性の特徴
命と人生への関わり	命の誕生への関わり	看護師は命を左右する大きな責任を背負っている職であることを改めて感じた
		新しい命の誕生といった面で、緊張感があり喜びがある
		新しい命が誕生するという次世代につながっていく場
	次世代への関わり	母性看護学は一生を通し、また次の世代にも結びついていく領域である
	女性の一生涯への関わり	分娩するのを援助するという一時期のものではなく、女性の一生涯について支えていくもの
	不妊への関わり	妊娠・分娩だけでなく、不妊治療に対しても、母性看護を行うことが大切である
母性看護特有の視点と知識の必要性	幅広い視点	異常がないかをみていくのではなく、正常かどうかをみていき、正常に経過できるようにケアをするという視点
		幅広い視点を必要とし、常に母子一体の考え方をもとに先を見据えた援助を行っていくことが求められている領域である
	特有の知識の必要性	妊娠・分娩・産褥の経過、新生児の経過など健常な経過ではあるが特異性の高い知識が多く必要である
		母性看護特有の知識と思考が必要
母性看護の難しさ	支援の難しさ	母性看護は正常であることが普通であるが、その普通のことをどのようにサポートしていけば、母子共に健康な経過を廻ることができるのか、正常を維持しサポートしていくのはとても難しい
	アセスメントの難しさ	順調な経過であるとアセスメントすることは、正常な経過、異常な経過、今後どのような経過をたどるかなど様々な知識と予測とを比較することなので、母性のアセスメントは難しい
	母子一体として看護することの難しさ	母子を一体としてみていかなければいけないというところに難しさを感じた
看護の中での母性看護の捉え方	はじまりの領域	命の誕生や成長をサポートしていく領域である母性看護は、成人看護や老年看護など、すべての領域の出発点なのではないかと感じた
		母性看護とは、命の重みを感じることができ、大きな喜びや幸せを感じることができ、全てのはじまりの場

Ⅲ．考察

まず母性看護の対象は，妊娠・出産・育児に限定されるものではない。しかし，実習は周産期を中心とした産科領域での実施となり，受け持ちは褥婦と新生児であり，外来では妊婦健診を中心としている。そのため周産期以外の対象者は，外来での実習中に来院した思春期や更年期，老年期の対象者に接する機会がなければ，ほとんど

関わることなく実習が終了してしまう。あとは，国家試験の対策として自己学習するほかない。今回の調査から，実習前の看護２年生は，周産期に関する対象者のみを母性看護の対象者として捉えていた。ただ，周産期に関わる家族を対象者として含むことを意識していることもわかった。これは，「母性看護学技術論」を教授する際，実習を意識した内容になり，学生は母性看護の対象者のイメージを周産期に限定してしまうと考えられた。よって，看護２年生を対象に行う講義・演習において，母性看護の対象者についての教授を，女性のライフサイクルを考慮し，それをより意識的に行う必要があると考える。

次に母性看護は，疾病を持たず健康な人を対象としているため，学生は対象者を捉えにくく，理解しにくいと考えていたが，学生は他領域との違いとして強く印象に残していた。これは，母性看護学の講義の最後に，事例を使用した看護過程を実施し，「健康課題」を挙げることを課していること，また実習で受け持つ褥婦のセルフケア能力の高さから健康な人を対象とすることへの印象の強さが伺えた。

次に実習を終えた看護３・４年生への調査結果から，学生は母性看護学のイメージをより複合的に捉えていることがわかった。特に，【母性看護の特徴】は多くのコードとサブカテゴリーから構成され，実習現場での関わりから母性看護の多様性を実感していた。また，授業および講義の進度に伴い，看護学生がもつ母性看護学の対象者に関する正しい知識が蓄積され，母性看護に対するイメージが徐々に確実なものへと変化していくと考えていたが，実習での対象者が妊産褥婦に限定されていることから，実習を終了した３・４年生は，より強く母性看護の対象者を周産期に関わる女性とその家族として限定的に捉える結果となった。反面，妊産褥婦を受け持ち，母性看護の特徴の一つである「母子一体という考えへの変化やウェルネス志向[3]」について，きちんと学べていたことも分かった。また，今回の調査から，講義のみの看護２年生も実習終了後の看護３・４年生も共に，「観察の重要性」について挙げ，母性看護の特徴として捉えていることが明らかとなった。これは，健康でセルフケアレベルの高い対象者であっても，身体的・生理的に変化が著しい母性看護の現場では，褥婦や新生児を担当した時に常に観察力を求められる。学生はこのことに気づいていることが分かった。

さらに，少数ではあったものの，[幅広い視点]を持つことや[女性の一生涯への関わり]，[次世代への関わり]，[不妊への関わり]についても述べており，実習での関わりが周産期以外の対象者への関心を誘発していた。全ての学生が多様な対象者と関わることは困難であるため，グループカンファレンスでの学びの共有を生かし，母性看護の対象者理解を深めていく必要がある。また，実習での経験から，[支援][アセスメント][母性一体として看護すること] を【母性看護の難しさ】として挙げられていた。これは，【母性看護の特徴】として認識されていた，[正常な経過への支援]や【母性看護の特徴的な対象者】の中の[対象者が健康である]ことが，実習を実践する上で，対象者を捉えづらくし，【母性看護の難しさ】として認識されていた。山口は，学生が母性看護学に苦手意識を感じたことがある理由として,「特別な内容」であることや「実際のイメージがつきにくい」「実際の経験がない」ことを挙げている[1]。今回の調査からも，これらの理由に当てはまるサブカテゴリーが挙がり，学生の母性看護学に苦手意識を感じさせる要因ともなり得ることが明らかとなった。また学生は，実習は自分の母性の成長発達に影響すると考えている[4]とあり，今回の調査においても，[命の誕生への関わり]や[次世代との関わり]として意識している学生がいたことから，母性看護学を学ぶことは次世代育成の役割を担っているともいえる。

以上のことから，母性看護学の演習や実習では，妊産褥婦および新生児を対象とした項目のみを実施しており，その他の対象者である思春期・壮年期・更年期・高齢期の女性を対象とした演習および実習項目は実施していない。また，母性看護の特徴の一つである健康である対象者が，正常な経過をたどり，セルフケアが確立していることから，母性看護の難しさを感じている学生が多かった。今回の調査で明らかとなった学生の母性看護へのイメージから来る学びを生かしつつ，「母性看護学概論」での女性のライフサイクルを意識した講義を，その後の講義・演習，さらに実習にも引き継ぎ，学生が母性看護の対象者の視点を広く持てるようにする工夫が必要である。

文献

1）山口静江：母性看護学に対する苦手意識の形成要因と軽減要因，第43回日本看護学会論文集　母性看護，84-87，2013.

2）木下照子，神田聖子：看護大学生がイメージする「すてきな妊婦」に関する研究，新見公立大学紀要，33，99-102，2012.

3）堀内輝子，信井由希子：プロジェクト学習を取り入れた母性臨床看護の演習での学び，湘南短期大学紀要，21，17-20，2010.

4）梶原恭子，富安俊子，田中千絵，井手信：看護学生の妊婦に対するイメージの検討，母性衛生，47（4），563-570，2007.

5）鈴木樹里：分娩見学実習が看護学生の分娩に対するイメージに与える影響，神戸市看護大学短期大学部紀要，23，95-100，2004.